

養殖水産動物保健安全対策

宇野悦央, 辻村明夫, 見奈美輝彦

養殖業における魚病被害の増大は経営上重要な問題の一つであり、魚病対策を一層充実させることが求められている。また、食品として安全な養殖魚生産の確立を図る必要がある。このため、魚類防疫対策、水産用医薬品対策を主な項目とする養殖水産動物保健安全対策を平成6年度から実施している。

魚類防疫対策にかかる平成6年1月から12月までの疾病検査件数は計156件であり、内訳はアユ144件、アマゴ12件（イクチオホヌス症4、カラムナリス症3、白点病3、エドワジェラ症1、水カビ病1）であった。検査件数はアユでは前年（133件）とほぼ同じであるが、アマゴでは前年（5件）より多くなっている。

表1 養殖アユの疾病検査状況

病名 / 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
ビブリオ病	1 (1)	2 (1)	2 (2)	1 (1)	2 (1)	1 (1)							9* ¹ (7) [3]* ²
冷水病	9 (7)	3 (2)	8 (5)	7 (6)	4 (3)	6 (5)	7 (4)	5 (5)				6 (3)	55 (40) [17]
シュードモナス病	1 (1)		2 (2)	3 (2)	3 (2)	3 (2)	1 (1)					3 (2)	16 (12) [7]
混合感染症													
冷水病+ビブリオ病	1 (1)	2 (2)	2 (2)	2 (1)	1 (1)	1 (1)							9 (8) [4]
冷水病+シュードモナス病	1 (1)	1 (1)	1 (1)	2 (2)	2 (1)	3 (3)	3 (2)	1 (1)				2 (2)	16 (14) [7]
細菌性鰓病		4 (4)	4 (4)	2 (2)			1 (1)					1 (1)	12 (12) [9]
その他の細菌性疾病								1 (1)				1 (1)	2 (2) [2]
真菌症	1 (1)	4 (3)	3 (2)	2 (1)	2 (1)	3 (3)	1 (1)	1 (1)				2 (1)	19 (14) [8]
寄生虫性疾病			1 (1)	2 (2)			2 (2)	1 (1)					6 (6) [6]
計	14 (12)	16 (13)	23 (19)	21 (17)	14 (9)	17 (15)	15 (11)	9 (9)	0	0	0	15 (10)	144 (115) [20]

* 1 件数 * 2 ()経営体数, []同実数

養殖アユの疾病検査状況を表1に示した。疾病は20経営体（延べ115経営体）において1～8月と12月にみられ、各疾病の状況は以下のとおりである。ビブリオ病は1～6月に9件（3経営体）みられ、すべて *Vibrio anguillarum* の血清型A型によるものであった。件数は前年（15件、9経営体）

より減少しているが、これはC型によるものが無かったことによる。冷水病との混合感染症から分離されたものも含めた *V. anguillarum* 17株の薬剤感受性を表2に示した。A型は16株で、フロルフェニコールに対して高い感受性を示したがオキシリン酸に対しては感受性の低下がみられ、また、スルファモノメトキシとオルメトプリムの配合剤に対しても感受性のやや低い株がみられた。C型は1株であるがいずれの薬剤に対しても高い感受性を示した。冷水病は55件（17経営体）で全体の38%を占め、前年（58件、16経営体）と同様に多かった。シュードモナス病は3～7月を中心に16件（7経営体）みられ前年（6件、5経営体）より増加した。冷水病とビブリオ病またはシュードモナス病との混合感染症についてみると、ビブリオ病との混合感染症は1～6月に9件（4経営体）で前年（3件、3経営体）より増加し、また、シュードモナス病との混合感染症は16件（7経営体）で前年（1件）より激増した。次に、疾病全体を冷水病、混合感染症およびその他の3つに大別しそれらの月別検査割合を図1に示した。冷水病は早期の湖産種苗導入後しばらく経過した1月に64%と高く、2月は19%に低下するがその後増加し8月には56%であった。混合感染症は11～24%であり、両者を合わせた冷水病の割合は全体的に約40～80%に達する。細菌性鰓病は2、3月を中心に12件（9経営体）みられ、そのうち12月の1件は11月に導入した湖産種苗由来のものであった。その他の細菌性疾病は2件（2経営体）でカラムナリス症等であった。真菌症は19件（8経営体）で前年（15件、7経営体）とほぼ同じであり、内訳は水カビ病15件、真菌性肉芽腫症3件、胃鼓脹症1件であった。寄生虫性疾病は6件（6経営体）ですべてギロダクチルス症であった。以上、平成6年は冷水病が前年と同様に非常に多かった。

魚類防疫対策にかかる県内防疫対策会議は11月22日（有田市）に、また、冷水病県内対策会議は12月20日（桃山町）に各々開催した。防疫対策定期パトロールは平成6年4月から平成7年3月までに

表2 ビブリオ病菌の薬剤感受性

No.	分離年月日	血清型	SO* ¹	OA* ²	FF* ³
1	H6.1.4	A	3+	2+	3+
2	1.26	A	3+	3+	3+
3	2.8	A	2+	1+	3+
4	2.24	A	3+	2+	3+
5	2.28	A	3+	2+	3+
6	3.4	A	3+	3+	3+
7	3.15	C	3+	3+	3+
8	3.16	A	3+	2+	3+
9	3.23	A	2+	1+	3+
10	4.13	A	2+	1+	3+
11	4.26	A	2+	1+	3+
12	4.28	A	3+	1+	3+
13	5.6	A	3+	1+	3+
14	5.18	A	2+	2+	3+
15	5.30	A	2+	2+	3+
16	6.6	A	3+	1+	3+
17	6.7	A	3+	3+	3+

*1 スルファモノメトキシおよび
オルメトプリムの配合剤

*2 オキシリン酸

*3 フロルフェニコール

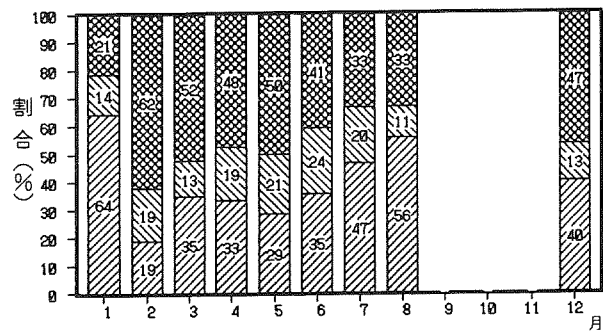


図1 冷水病および混合感染症の月別検査割合

18回、また、水産用医薬品対策にかかる巡回指導は平成6年4月から12月までに9回各々実施した。さらに、養殖アユを対象とした医薬品残留検査はスルファモノメトキシシリン(12検体)とオキシリン酸(18検体)について8月に行い、すべて残留は認められなかった。